

■巻頭言

「地域の活性化に思う」

巻頭言では地域の活性化に関するコメントが載せられ、地域の活性化には「若者」、「バカ者」、「よそ者」が必要と指摘されている。私も様々な市町村の町おこしに「よそ者」として関わり、多くの地元の方々と話してきたが、筆者が指摘している「若者」、「バカ者」が意外と少ないことに驚かされる。

「バカ者」とは、「何かに取り付かれたように夢中になっている者」という意味合いから名付けられた贅辞であるが、地域に「バカ者」がいても往々にして外からの移入者であることが多く、地元育ちの「バカ者」は意外と少ない。なぜ地域から「バカ者」が育たないのか。それは、これまでの地域活性化計画の多くが様々な補助制度の制約の中で取り纏められてきた、いわゆる行政主導型であり、地域の活性化に取り組もうという地元住民自らのモチベーション向上を阻害してきた側面があったからではなかろうか。しかし、地方自立が叫ばれる今日、真に地域の活性化を実現するためには地元の盛り上がりが不可欠である。

どこの町にも「若者」はいるし、「バカ者」も潜在しているはずである。そこで重要なのは「よそ者」の果たすべき役割だと思う。移入してきた「バカ者」は既存の地域活性化計画とは関わりなく自分の発想に基づいて行動するだけに、地域に新しい息吹を吹き込む効果は極めて大きい。しかし、今求められるのは、単に自分の発想に基づいて行動するだけの「移入バカ者」ではなく、町民が何かに取り組んでみようという地域モチベーションを最大限引き出すためのノウハウを持った「よそ者」の存在である。

地域づくりの手伝いをするコンサルタントが、単に他地域の成功事例を情報として紹介するだけでは地域が必要とする「よそ者」には成り切れない。様々

なノウハウを活かして、地域にいる普通の「若者」を「バカ者」に仕立て上げ、地域に散在する個々の潜在エネルギーを「地域力」として束ねていく「よそ者」が求められている。

少子高齢化の日本において、自分の町もいずれ衰退していく不安を感じ、自分の将来に不安を抱きながらも何をどうして良いか分からず、戸惑っているのが今の地域問題の現状であるならば、その解決策を共に考え、アドバイスすることがコンサルタントとしての技術士の責務であることを、巻頭言は示唆していると感じた。 (文責 H.F)

■報告

「第 45 回 北海道支部定期総会報告」

私は今回の定期総会を欠席していたため、総会内容を興味深く読ませていただきました。議案は全て了承されたようで、支部役員の方々は安堵されていると思います。第 3 号議案が「協賛会員」の「会友」への名称変更とのことですが、私が最初に入会したのは「技術士センター会員」でした。今回が 2 回目の改訂になりますが、大きな問題なく移行していることは関係者のご努力の成果だと思います。

加えて、本誌「コンサルタンツ北海道」を発行しているからこそできる仕組みであるという斉藤支部長の説明があったとのこと、一筆書かせていただいている者としても、うれしく思います。講演会の北大総長 佐伯氏の講演も最近の大学事情に関したおもしろそうなお話で、総会・講演会参加が 210 名、懇親会参加が 124 名と盛況であったことがわかります。技術士会北海道支部の益々のご発展を祈念しております。 (Y.K 血液 AB 型)

「第8回 技術フォーラム」

特別課題「危ない!! 過去を忘れた最新技術」

今回のフォーラムの特別課題である技術の伝承、データの信頼性、そしてアンケート結果を興味深く読ませてもらいました。団塊の世代の代表として石戸さんの若手へプロセスの軽視とマニュアルへの高依存の指摘や、コンサルタント業界の「経営層」と「職員層」の現状対比図が「そうだ・そうだ」と納得させられました。一方、若手の優である田中氏の先輩諸氏への言い分として「現在の方が忙しい、発注者の要求も質・量とも高度化している」は自分たちを取り巻く環境の現状を端的に表しており「そうだよね、大変だよね」と同情している自分がいます。

情報系の若手ホープである小山田氏のソフト・PCの目視確認出来ないデータの危険について「5項目の検証」の提案は、これから実践していきリスクの低減に繋げていける指標を与えてくれるものでした。全体討論でのアンケート結果も、非常に的確に纏められており、鈴木氏他の事業委員のメンバーのご苦勞に感謝して、読者の声を終わりたいと思います。(職場が変わった J.I)

「平成21年度札幌弁護士会市民ネットワーク委員会との意見交換会報告」 弁護士会と技術士会との業務提携の可能性に向けて

これを読んで、技術士会と弁護士会が交流していることを始めて知りました。いわゆる異業種交流というやつで、他の専門分野の方との意見交換によりお互いを切磋琢磨していくのはとてもよいことだと思います。さらに、二つの会が業務提携をしてWinWinの関係を目指すというのですから、少々驚きました。それも、弁護士といえば、法律により我々市民を守ってくれる人たちのはずですが、日ごろ法律すれすれで仕事をしているものにとっては、何か近づき難い存在のように感じていたからです。

しかし、我々のような小さな会社においては、今年から始まった中小企業支援センターを通じて、無

料で気軽に相談してほしいとあり、大変有り難く思いました。しかし、相談をお願いすることはあっても、弁護だけは絶対にお願ひしないぞと、固く心に誓いました。(M.S)

■寄稿文

「泥炭の予圧密効果」

今回の「泥炭の予圧密効果」については大変興味深く読ませて頂いた。泥炭の圧密沈下について塑性的であるという佐田氏のご意見については、私も賛成である。私と泥炭とのつきあいは長く、何と云っても我が家は泥炭地盤の上に立っている。従って家を建てるに当たり基礎をどうするかについてはいろいろ悩み、建築してからでも不同沈下や家の傾きなどの経過観察を続けた経験がある。

また、沈下には地下水の影響もかなりあると思う。しかし泥炭は有機質であり、何となく砂礫のような無機質の土とは違った暖かみがあり、それだけ親しみを持てる。酸性土壌である点に注意して種子を植えれば植物の生育も結構良く、収穫も他の土と引けを取らない。数式では表現できない、泥炭の別な顔についてふと考えた次第である。(K.T)

「低炭素社会を目指したグリーン成長戦略と技術士の役割」

低炭素社会を目指して、方向性、ビジネスモデル、技術士の役割など多岐にわたっての大作でした。消化不良になりながら拝読させていただきました。執筆者は、技術士の役割としてコーディネーター力が必要となり、事業者と住民の双方から信頼を受け中立的な立場で調整できるコーディネーターこそあるべき姿であるとされております。

これまでの体験を振り返ってみますと、ともすれば事業者の立場を斟酌^{しんしゃく}してしまいがちであったことを思い出し、もっと先を見通した視野で、もっと広い視野での斟酌をできなかったのかと心が痛みます。(MK)

「私のプロジェクト X」

わが母校の教授であられた山口先生の寄稿文「私のプロジェクト X」を拝読させていただき、私もある想いに駆られました。大学を卒業して約 30 年を経ようとしている今、自分のプロジェクト X はいったい何だったのだろうか？ また、これまでの人生で何か誇れる業績や功績を残せたのだろうか？

若い頃の私は、土建業は地図を変えるロマン溢れる仕事だと信じて疑わず、「3 K」と呼ばれた土木建設業を「地球改造業」と呼んでいたものです。しかし、現政権による「コンクリートから〇〇へ」など、土木工事などの公共事業が悪いものだというように扱われ、大学の学部学科名称に土木という文字が使われなくなったことは誠に残念に思います。今回の寄稿文は、自分の半生を振り返り、これからの自己研鑽の道を考える良い機会を頂いたと感謝しております。

(土木工学科卒業生 M.T)